

【にんげん部門（高校生の部）・中外日報社賞】

ありがとう先生

私立函館大谷高等学校 2年 成田 来琉未

私は小学校四年生の時に転校をした。新しい場所で、新しい友達ができると思っていた。すぐに学校のお祭りがあり、自分は誰とも一緒に行く約束ができないでいたから、食券を買う必要もないと思い注文をしなかった。

でも、それがとても哀しくて、ずっと泣かずにがまんしていた涙があふれた。「私には友達がいらない」と涙が出た。泣いている私に、お母さんが寄り添っていてくれていたのを覚えている。

食券を買っていないけれどいいですか？と、その時の担任の先生が、お母さんに電話をしてきた。お母さんは担任に食券を買わなかった理由を伝えた。次の日、担任の先生から封筒を渡され、帰宅したお母さんに渡すと、慌てて担任に電話していた。「私がノルマで買った食券です。これを持ってお祭りに行ってください。一緒に行く子も声をかけています。楽しみにしている様子ですから、ぜひ食券を使って下さい。」とあった。お母さんは担任に感謝を伝えていた。その会話を聞いて私も、うれしかった。お祭りに一緒に行った子とは、中学も一緒、部活も一緒になった。

お母さん今でも時々、思い出してその時の担任の先生の話をする。そして私も元気でいるかなと考える。

私は今高校2年生になった。中学から始めた卓球を続けている。相変わらず自分から積極的に話かけたり、活発的・社交的とは言えないが、一つのことをやり遂げることの大切さや、一つのことを共有できる仲間がいること、そして仲間の中に自分がいることをうれしく思う。

あの日、一つのきっかけを作ってくれた担任の先生に感謝したい。ありがとう先生。